

中国講談『評書三国演義・美女連環の計』の芸能学的研究

吉川 良和

要旨

中国では北宋（960～1279）期の演芸場で、「三国読み」の講談師・霍四究がすでに活躍していた。だから、講談「三国志」はじつに長い歴史をもっていることを知る。それは歴代の講談師が工夫を重ねて研ぎ、今日に伝えていることをも物語っている。往事の中国では識字率が極めて低かった。それでも、庶民たちが「三国物」の人物や事件が、目に見え、耳に聞こえるように思えたのは、講談と芝居のお蔭である。その中国講談では、北京のものを「評書」という。その芸態はほぼ日本の講談に似ているが、張扇の代わりに、マッチ箱大の固い木製の「醒木」を打つ。

中国の講談は、「水滸伝」を得意とする者など、各種得意演目があって、南京の康重華のように、代々「三国読み」の家もある。本論では北京の評書演者・連闊如の伝本『評書三国演義・漢末風雲』を定本とし、話の筋立てにそって、使われている技法を明らかにせんと試みた。「三国志物」は元代以降、印刷本が出たが、決定的小説の刊本は、明代16世紀中頃の羅貫中撰『三国志通俗演義』で、後世最も人気のあるものだ。連闊如の評書もこの本の影響を受け、参考としている処も少なくない。だが、羅貫中本はあくまでも目で文字をたどる「読者」を相手に想定したもので、目で読んで理解できても、読みあげたものを、聴客の耳だけでは分からぬ処も多々ある。しかも、歴代の聴客は非識字者が多い。そこで、連闊如は羅貫中本を参考にしながらも、それをかみ砕き、補足し、物語を盛り上げる聴覚芸術に仕立てているのである。

筆者は評書の技法を、①物語の順に述べていく「正筆」技法、②後からある事柄の典故・原因などの説明をする「倒筆」技法、③話の間に説明などを挿入する「挿筆」技法、④伏線を敷く「伏筆」技法、後で起こる出来事を徐々に醸し出す「暗筆」技法、⑤挿筆に似るが語彙に若干の説明を入れる「補筆」技法、⑥突如驚くべき事態を現出させてくる「驚人筆」技法。この「評書技法」6種に、説唱用語も加えて分析を試みた。その結果、羅貫中の『三国志演義』が有していた董卓謀殺事件への人間の言動が、評書芸能のとくに「驚人筆」を使った「暗筆」技法によっていることが闡明された。

もともと、羅貫中本はじつによく仕組まれている。連闊如の「連環の計」の段は、「私怨」を搔き立て、「国家の大義」を貫くという、構造の上になりたっている。けれども、これは単なる私欲の争いではなく、さらに中国人の道徳心をも加えた智闘が繰り広げられているのだ。謀殺される悪徳人物は当然単純な表現に陥りやすいが、首謀者、協力者、利用される者、その各人物が生き生きと血がかよい、まさにその姿が見え、その声が聞こえるごとくである。この点が、この評書の最大の魅力で、連闊如は諸技法を最大限に駆使して語っている。

今回は長篇「三国志物」の一部「連環の計」の段だけを扱ったので、「開臉」のような初登場の人物の身なりの描写に関して詳述できなかった。また、「場景表白」もこの段だけなので、いさか少ない嫌いもある。稿を改めて、別の大段落「柁子」を扱うことで、さらに評書芸術の技法を掘りさげて研究する所存である。

はしがき

筆者は1996年、安徽省徽劇団の来日招聘に携わった。徽劇は京劇の源流の一つである。その時の演目が、『三国志・美女連環の計』であった。「三国志」の話のなかで、司徒・王允の策謀に基づき、美女・貂蟬の色香によって、呂布に横暴な董卓を誅殺させる芝居は、独立してこの部分だけでも歴代演じられてきた。元雜劇⁽¹⁾・明传奇の王濟『連環計』(『明清传奇選刊』中華書局 1988)から京劇でも『貂蟬(連環計)』⁽²⁾『鳳儀亭』『誅董卓』等など。徽劇団はそれらを参考に改編脚本を推敲中であったので、劇団側の新編作品に関して討論するにあたり、筆者も羅貫中撰『三国志通俗演義』(以下、『演義』と簡写)⁽³⁾を読み返した。すると、原文がじつに周到に編まれた筋立てであることに驚嘆した。

筆者は演劇・音楽・雜技・舞踏・説唱(語り物)の5部門を対象にする、中国芸能史学を研究してきた。だが、説唱に関しては、専門に深く論じたことは少なかったので、2002年、目連救母説話の2種の説唱について、蘇州の伝統的語り物芸「評弾」に用いられる専門用語⁽⁴⁾を運用し、絵解きや歌入り仏教説唱の分析をして、その特徴の闡明を試みた⁽⁵⁾。「評弾」とは、日本の講談に類する「評話」とフシ入りの淨瑠璃・浪花節にあたる「彈詞」を合わせた略語である。「評話」は北方では「評書」(「評詞」)、とよんでいる。この評書は17世紀後半に北京に来た有名な柳敬亭から芸を授かった王鴻興が、創めたという⁽⁶⁾。道具は、手拭い・扇子・醒木を使う。醒木とは硬い小さな木製の拍子木で、わが講談の張扇の役目をし、手拭い・扇子はわが講談・落語同様に様々のものを表す。

さて、本論では、連闊如(1903~1971)の伝本『評書三国演義・漢末風雲』なる評書演出本を定本とした(連闊如口述『評書三国演義』中華書局 2006)。これは連の娘・連麗如が父から直接聞いた口述筆記で、いわば譲り受けた貴重な語りの骨子を記した「冊子 zhaizi」を基礎にした伝写といえる。「冊子」とは、往事、評書演者が、師匠から伝授された秘本のことをいう。内容は、一般的には、演目の粗筋・登場人物の姓名と綽名・賦讃・詩讚および「開臉児」、用いる武器などである。

連闊如は原名を畢毓珍といい、北京生まれ。24歳(1927)、李杰恩に弟子入りして評書を始める。1930年代、ラジオで歴史物を語り、有名になった。1957年、『評書三国演義』がラジオで全国的に名声を博する。そして、1960年、娘にそれを伝授した。その特徴としては、以下の5点があげられている。①史実と原著を重んじ、『三国志演義』の各種版本を参考に添削し、内容をスッキリとさせた。②原著の荒唐無稽な迷信的内容をのぞき、人物や事柄に批評を加えた。③京劇など、芝居の仕草(「手面」という)を取りいれて、人物の形象・性格を深く表現し、文字だけの表現を超えた。④原著の典故、詩詞、書簡、上奏文、地名、官職、器物などに対して、「書外書」として細かく説明するが、それも当を得ている。⑤言葉は文語と口語を交えるが、現代口語を主としている。同時に、原著の精彩のある文語をのこし、口語と有機的に結合させる。通俗的で分かりやすく、また文雅の味も失わず、魅力のある語り口とある⁽⁷⁾。

評書は、随意に放言をしない「方口」と、臨機応変に対処し、即興的に發揮する「活口」がある。評書の場合、歌い物ではないので、実際の上演では、一字一句同じとはならない。筆者は以前、南京で偶然代々「三国志読み」の康重華の揚州評話をラジオで聞いたが、やはり台本通りではなかった。聴客の客層によっても変化を求められるが、定席の場合は、工夫をこらせど逸脱しない口調や語りの「方口」が、流しの演者は「活口」が多いと思われる。ちなみに、新演目の創作や、原作を敷衍して、原著の人物・物語を豊かに展開させることを「纂弄(寄せ集めて作る意)」という。

そもそも、評書は、表・白・評が三位一体となって成立している。「表」とは評書の地のコトバで説明、「白」は登場人物のセリフ、「評」は登場人物や事柄に対して、演者が与える評価。単に筋を伝えるのではなく、演者が「評」を加えるので、「評書」という。

本論では、連派の特徴を加味しつつ、上記の評書の専門用語を用いて、評書の技法を具体的に見ていくことで、演者がいかに語りに工夫をこらしているか見ていきたい。なお紙幅の関係で、今回は全ての技法に言及できなかった。他日、稿を改めて補充する所存である。また、不足の点、誤解があれば、ご示教賜りたい。

§ 1 董卓謀殺の史書記述

① 董卓について

董卓謀殺は虚構ではない。『三国志・董卓伝』⁽⁸⁾に：「初平三年（192）四月二十二日、司徒（政治・軍事の最高長官）の王允、部下の士孫瑞、董卓の義理の息子・呂布らが共謀して董卓謀殺をはかった。このとき、天子（献帝）の病気平癒の祝いを未央殿でしようと、多数の臣下を集めた。呂布は同郷出身の将校・李肅らに命じて、部下10名ほどに衛士の服を着せてニセ衛士とし、脇門で待ち伏せさせた。呂布はニセの詔書を懷に入れて、董卓が到着すると、李肅が入門をはばんだ。董卓がふりむいて、「呂布はどこだ！」と呼ばわると、呂布は「詔だ！」と見せて、董卓とその一族、董卓の屍に走り寄った田景を殺した。董卓の家来で殺されたものは3名。その他のものには、あえて手を出さなかった。」とある⁽⁹⁾。

また、裴松之の『三国志』『裴注』に引く『英雄記』には、馬がつまずいて先に進まなかつたので、董卓は不審に思い参内を中止しようと思ったが、呂布が参内を勧めたので、衣の下に鎧を着けて向かつた⁽¹⁰⁾。……董卓の屍は市場にさらされた。肥満であったため、そのあぶらが流れ出て地面にしみ草が赤く変色した。屍を見張っていた役人は、日が暮れると大きな灯心をつくり、董卓のへその中において灯火とした。灯火は朝まで消えず、このようにして何日も経過した⁽¹¹⁾などの挿話もすでにここに出ていている。

② 呂布について

『三国志・呂布伝』に董卓は自分が他人に対して横柄な態度であったから、内心恐れていつも呂布に護衛をさせていた。また、董卓は気性が激しいうえ短気であった。ある時、かんに障ったことがあったので、呂布に小さな戟（長柄の先端に三叉の刃を装着させた武器で大形のものを呂布が常用していた）で襲いかかった。呂布は力で押さえつけ、さっとかわしてから、詫びたので、董卓も寛恕した。だが、これ以後、呂布は怨みを募らせた。董卓はいつも呂布に奥御殿の守備をさせていたが、呂布は董卓の侍女と密通し、事が露見するのを恐れて、内心落ち着かなかつた。（『後漢書・呂布伝』にも引く）⁽¹²⁾……王允は呂布が自分と同郷で、武勇にすぐれた人物であるため、丁重にもてなしていた。後に呂布は王允を訪ね、董卓に危うく殺されそうになったと訴えた。王允はこの時には士孫瑞と董卓謀殺を計画していたので、呂布に打ち明けて内通させようとした。呂布が董卓とは父子の間だとためらうと、王允は「呂」と「董」では血縁関係はない。自分の命を守ることが大事ではないかといった。かくて呂布はこの計略を承知し、自ら董卓を謀殺することになる⁽¹³⁾。

同伝の陳登の言葉に「呂布は、武勇はあるが、（計略を）謀ることができない（有勇無謀）」とあり、『裴注』に引く「曹瞞伝」に「人中の呂布、馬中の赤兔（人中呂布、馬中赤兔）」と呂布の勇猛さを称えた言葉がすでにある。これらの言葉は後代呂布の形容によく使われる。

③ 貂蟬について

「連環の計」で不可欠の人物貂蟬は史書にその名を見ない。ただ、上記の『呂布伝』に「董卓はいつも呂布に奥御殿の守備をさせていたが、呂布は董卓の侍女と密通し、事が露見するのを恐れて、内心落ち着かなかつた。」の記載から、「侍女」を貂蟬に仕立て上げて、「美女連環の計」は形成されたといわれる。

④ 事件について

司馬光撰『資治通鑑』(11C後半)には、以上の謀殺事件が纏められている。

後の「三国志物」は、こうした史書の記述を基礎に、敷衍・発展されていくのである。

§2 物語「三国志」・『三国志通俗演義』までの発展

- ① 唐代・李商隱『鴉鶴詩』に、「或いは張飛の鬍を謔り、或いは鄧艾の吃を笑う（或謔張飛鬍、或笑鄧艾吃）」とあるところから、中川諭氏は鄧艾の吃音は『三国志・鄧艾伝』にあるが、張飛のひげ面については『三国志』に記述に全くないので⁽¹⁴⁾、唐代に「三国志説話」は敷衍していたと指摘されている。
- ② 北宋代・蘇軾『東坡志林』卷一に王彭嘗の言として、子供が「三国志」の語りを聴いているとあり⁽¹⁵⁾、この時代には演芸場「勾欄」があって歴史物を読む「講史」という芸人もいた。さらに、専ら三国説話を得意とする「三国読み」の講釈師・霍四究の名もある（孟元老『東京夢華録』卷五）。
- ③ 宋代に花開いた語り芸能は、その種本作家の集団「書会」もあったが、「三国志物」で遺っているものは未発見である。次の元朝のものでは、語りの台本に挿絵を附けた「三国志物」が遺存する⁽¹⁶⁾。
- ④ そして元末明初の羅貫中編今日の『演義』が出現した。それまでの三国説話をもとに纏めたもので、1522年刊本が出版された。蔣大器の序文には「事実を慎重に取捨選択して、『三国志通俗演義』と名づけた。その文章はさほど難しくはなく、その言葉はさほど俗ではない。事実を記して、史に近づけることを目指した。」と述べる⁽¹⁷⁾。

かくて、「三国志物」の決定版が出た。だが、この序文にいうとおり、「さほど俗ではない」のであって、まして文字で書かれているから聴覚芸術の評書は、そのままで「読む（語る）」わけにはいかない。また、評書でいう大段落「柁子」（ここでは「連環の計」）の分け方も、話の「ヤマ場」の置き方も変わるので、『演義』の回数とは違う。そこには、庶民である聴客を相手に、様々な技法を用いて、注意を喚起する工夫がなされているからである。

§3 評書の話の筋立てにおける技法

- ① 「正筆」は物語の順に述べていく技法。
- ② 「倒筆」は後からある事柄の典故・原因などの説明をする技法。
- ③ 「挿筆」は話の間に説明などを挿入する技法。「書外書」ともいい、本題の話を盛り上げたり、笑いを生み出したりする。即興で入れたものは、「簧書」という。
- ④ 「伏筆」は「伏線を敷く」技法。話芸ではとくに「種根」という。
- ⑤ 「暗筆」は後で起こる出来事を、先にいくつかの事象を積み重ねて徐々に醸し出す技法。
- ⑥ 「補筆」は挿筆に似ているが、特に言葉に若干の説明を入れる技法。
- ⑦ 「驚人筆」は突如驚くべき事態を現出させてくる技法。

これらの技法名称は、元々小説の作成法を借りたもので、評書話芸の技法そのものの用語ではないが、「正筆」の語りだけでは、相手に理解しにくかったり、興味を惹起できなかったりする。その相手は読者ではない。聴客である。頁を読み返すこともできないし、読者個人を相手にしてはいない。聴客の客層に、合わせて語る必要がある。だから、評書は音声の技法だけでなく、読書とは異なる技法の運用が求められるのである。

§4 扣子（扣児）と暗筆・伏筆・驚人筆

評書の基本要素は扣子（話のヤマ場の段落）で、扣子を設けることを、「扣子を使う“使扣子”」という。評書芸人は上記の諸筆法を運用し、起伏に富んだ物語の筋をもって、しっかりと聴客の心を「擋んで離さない（扣住）」ようにする。以下、「連環の計」の筋立てを理解するために、「扣子」にそってたどっていこう。同時に、董卓謀殺の成功に結びつく言動が、この「連環の計」最大の魅力である評書の技法によって、いかに表現されているかを見ていくことにしよう⁽¹⁸⁾。

① 王允が月明かりの下、貂蟬に偶然会って、連環の計を打ち明け、その決意を確かめる。

*中国には「機縁がなければ物語は成立しない（無巧不成書）」という言葉があるが、「機縁」が「種根」となっている。中国話芸では、語りの話を「書」という。まさにこの偶然がなければ、この物語 자체が成立しない。「種根」（伏筆よりふさわしい語）技法。

② 呂布が金冠の礼に来たときに、貂蟬と会わせ、呂布はすっかり魅了させる。貂蟬も呂布の気に入られるようなそぶりをみせつける。王允は機をのがさず、貂蟬を側室に送る提案をし、呂布は王允を「岳父」と呼び、“以後、この呂布をお使いになることがあれば、わたくしが犬馬の労を尽くしましよう。”とまでいわせる。

*この「刷込み」から、最後の結果（謀殺）を生むまでのじわじわと積み重なる「暗筆」技法が始まる。以後、王允と貂蟬との「刷込み」が重要になる。

③ 呂布が訪れて来た数日後、王允は朝廷に参内して呂布が身辺にいない間隙に、董卓を自分の屋敷に呼び、貂蟬を見せる。

*両者反目の発端で、「種根」技法。

④ 王允はなん度も董卓に、昔の帝王の故事を引いて、董卓に対し禅譲されて帝位に就くのに相応しいと刷り込み、喜びの絶頂に達したときに、貂蟬を出してきて、舞い踊らせた。最後は呂布のときと異なり、王允も自ら御供して、その夜のうちに連れて行かせた。

*王允の「刷込み」と演出の知略で、貂蟬を董卓に差し出し、呂布が来たときの言い訳を用意して董卓のもとへ送った。これで、双方とも貂蟬は王允から正式に譲り受けたと信じ込ませて、後の反目激化の原因を作った「伏筆」技法である。

⑤ その帰途、呂布に出くわした。案の定、呂布は怒って王允に問い合わせたが、王允は用意した口実、董卓が自分の息子の嫁を見たいから連れていったとうまい言い逃れをした。

*この言い訳は、『演義』にすでにあるが、これはまさに「驚人筆」技法で毛宗崗の批文も⁽³⁾「嘘八百、人を玄中に入らしむ」（一派鬼話、令人入其玄中）とある。

⑥ 呂布は翌朝、董卓の丞相府に行き、貂蟬を迎えて行ったが、「“太師様ですか？ 昨夜、新しいお方を迎えて、床と一緒にされ、まだ起きておられませんよ。……” 呂布は聞いてカッとなつた。……大丈夫なる者、妻を奪われた恨みであるから。」と。

*ここで呂布の董卓に対する本格的怨恨が始まる。これも「暗筆」であり、「伏筆」。

⑦ 呂布は董卓の寝室の後ろに回って中を見たら、貂蟬が外を見ている。突如窓の下の池に呂布の姿があつたので、貂蟬は眉を顰めて、顔には哀愁を帯び、涙を拭った。呂布はそれを見ると、心が碎けそうになった。

*貂蟬は機を見て、つねに呂布の心をつかみ、搔き立てているのである。貂蟬の涙の演技は「暗筆」の常套手段。呂布と董卓双方から酷い仕打ちを受けたと演じわけるときに、必ず落涙し、反目をさらに助長させる。「暗筆」。

⑧ 呂布が中に入ると、貂蟬に心を奪われているのを董卓に察知され追いかれるが、あきらめきれな

い。董卓が病気になったことで、看病にかこつけて、介護している貂蟬に会いに行った。偶然、董卓が薬で朦朧としているときに、貂蟬は呂布に自分が董卓と一緒にいる辛さを落涙して訴えた。ほどなく、董卓は目を覚まし、呂布がいるのを知って、大いに怒り、これ以後、出入り禁止の命令をする。

*貂蟬は看病で董卓の心をさらにつかみ、呂布も見舞を口実に恋しい貂蟬に会いに来たのに、激しく叱られ、これで、反目は決定的となった。「伏筆」。

⑨ 呂布が去って行くとき、ちょうど董卓の婿の李儒に出くわした。呂布は見舞に来たのに、追いだされたと苦情を訴えたので、李儒は自分が説得するとなだめた。李儒の出現は筋立てを面白くしている。董卓に天下を取るためには、呂布の後ろ盾あってのことだと諭し、呂布をなだめ聊かの贈答品を与えて、小娘など譲るようにと進言する。

*董卓謀殺の計略が順調に運ばないように曲折を仕組んであるのが、この李儒の存在である。それも、「偶然」を装った登場になっているので、「驚人筆」技法といえる。

⑩ 病気で参内していなかった董卓は皇帝と長話をする。呂布はこの機を逃さず、丞相府の貂蟬に会いに行った。貂蟬は呂布に鳳儀亭で会う約束をし、王允から呂布との結婚を許されているのに、董卓に横取りされ、自分の身は穢れてしまったから、池に身を投げて死ぬという。呂布はそれを止めると、董卓から奪い返すように焚きつけるが、呂布は煮え切らず、なおも意図的に時間かせぎをしていると、果たして董卓が来た。董卓は貂蟬への未練が残っていた。もし董卓が呂布に譲ったら、連環の計は破綻するので、貂蟬も必死である。この場面が、『鳳儀亭』と芝居にもなっている。

*董卓の病→皇帝との長話→呂布の密会と、「書理」(筋立ての道理)に無理なく適っている。窮地に立つ貂蟬は、鳳儀亭で呂布に会って董卓から自分を奪い返してくれなければ入水自殺すると、捨て身の手段に出る。貂蟬は密会の場に董卓が来るのを予測して、抱きとめる呂布の姿を董卓に見せつけた。貂蟬の策略で、これも「驚人筆」。貂蟬の看病も、董卓の未練の要素になっていて、「暗筆」とも重なっている。

⑪ 呂布は董卓を見ると逃げた。董卓は追いつかないので、戟を投げつけたが、呂布は払いのけて庭の門を出るときに、また李儒に出くわした。そこで、李儒が「絶縳会」の故事をもって説得する。ここでは、貂蟬と李儒の必死の智闘が語られている。

*李儒は懸命に董卓を説得する。貂蟬は窮地に立たされる。「絶縳会」の故事は、『演義』にも簡単に引かれているが、連闊如は聴客にわかるようにかみ砕いて、得意の「補筆」技法で説明している。

⑫ 李儒の説得は道理と分かっていながらも、董卓は帝位という公の出世欲と貂蟬の私的愛欲の板挟みに悩んで、最後には「少し考えさせてくれ」と優柔不断な返事をした。

*連闊如は、「曹操なら絶対にこの言葉は口にしない」と、董卓の人格的欠陥と帝位の資格がないと評を入れている。「挿筆」技法。献身的に介護してくれた貂蟬への思いは、単なる好色ではない処に、この物語の秀逸なところがある。

⑬ 董卓は奥の間で貂蟬に、なぜ呂布と私通したのかと問うと、貂蟬は鳳儀亭で花を愛でていたら、呂布が勝手に来て手を出してきたとウソの弁解をした。実際は貂蟬が呼び出したのに。ところが、董卓は李儒の説得どおりに、年格好も似合いだから呂布に譲ると言い出した(連闊如の創意)。慌てた貂蟬はわざと大泣きをして、呂布は董卓の下僕にすぎず、かつ義子だから結婚はできないと言い張り、最後は剣で自害しようとする。それを抱き留め、自分の意にも適ったので、呂布と引き離すため、翌朝には郿塢城へ連れて行く。

*前は呂布が、ここでは董卓が抱き留めた。その結果として、呂布を貂蟬から離すために郿塢に連れ立っていった。董卓がこれで不在となり、王允らは董卓謀殺計略を都長安でできることになった。これも「書理」の妙で、「伏筆」である。董卓が李儒の説得を聞こうとしたので、貂蟬は計略がすべて水泡に帰

すと、今度は剣による自害の演技をする。これも「驚人筆」。

⑯ この報を知った李儒は翌朝一番、董卓を説得に来たが、董卓は聞く耳をもたない。貂蟬が言った義子の呂布とは結婚できないとの言葉を、「近親相姦になる」と利用し、拒否する。そればかりか、今後貂蟬のことを口にする者は斬って棄てると大変な剣幕である。賢臣李儒はかくて絶望して閉門蟄居し、董卓に諫言する者はいなくなった。

*董卓の貂蟬への心が「近親相姦」という言葉まで吐かせている。これは一種の「驚人筆」で、もちろん連闊如の創意だが、これが李儒の説得を覆した貂蟬の胆力・知力をも示している。

⑯ 見送る呂布にも貂蟬が見えた。……呂布はもう少しで地面に崩れ倒れそうになった。貂蟬は袖で自分の顔を覆い隠し、泣きながら呂布に向かって手真似をした。その意味は、私は行かねばならない、郿塲に行ったら、もうあなた様には会うことはできない。恨むべきはあの老いぼれの董卓だと。

*むなしく見送る呂布と、董卓に対する苦情を伝える貂蟬の姿に、呂布は董卓への憎しみがますます増長する。これも、「暗筆」の技法。

⑯ “どうして太師と郿塲に行かれず、ここで車塵を望見して歎息しておられるのかな”呂布がふりかえって見ると、王允であった。……“太師はまだ娘を温侯のお屋敷に届けておらぬのですか？”“はーあ”呂布は地団駄を踏んで、“司徒殿、ご病気でうちにおられたので、ご存じなかろうが、老いぼれは貂蟬を囲ってもうずいぶん経つのです。”王允は慌てたそぶりをして、“あなた様のいうことは、まことか？”“どうして司徒殿を騙しましょう？”王允はカット怒ったふりをし、杖を投げ捨てて、“太師は禽獸にも劣ることを！”

*この「連環の計」の段では、「病気」が重要な要素になっているが、董卓の病気、この王允の仮病、そして後の李儒が病気で董卓に再度進言できなかった「三病」である。ここでは、王允が董卓に貂蟬を献上したのに、先に娶るはずの呂布が、董卓に横取りされたと思い込ませる。それに董卓の悪徳を述べ立て、董卓への憎悪の感情を搔き立たせた。これも、王允の巧妙な計略で両者の反目を一層激化させる。「暗筆」。しかも、病気故の杖で、怒ってみせる処も、「書理」に適っている。

⑯ “わが娘を独り占めし、將軍の妻を横取りした。まことに我ら二人は天下の笑い物でござる。……將軍は世に冠たる英雄。天下に知らぬ者のいない温侯殿だ。妻を奪われた恨みをどうしてこの世ではらすのです？”……“この呂布は堂々たる英雄として、いつまでもあの老いぼれの下に甘んじることはありませぬ！誓って董卓を殺し、妻を奪われた恨みを晴らします！”

*人気のいない部屋に入れて、「世に冠たる英雄」と持ちあげる話術。呂布に董卓殺害を決心させる。それでももし露見したら「滅門之禍」を招くと念を押す注意深さは、聴客に事の容易でないことを再度自覚させる。これも「暗筆」の技法。

⑯ “そちに誠心誠意漢朝を救う氣があれば、それこそ当今の忠臣で、後世の青史に名を垂れ、百代までお名が伝わります。もし董卓を助けるようなことがありますれば、逆臣として、必ずや汚名が万年まで遺るでしょう。”……呂布は宝剣を抜き出して、左腕を一刺し。血がにじみ出た。これぞ、血の誓いというものだ。王允はこれを見て、これは本物だ。すぐさま袖をまくり上げて呂布の面前にひれ伏し、“漢朝が救われるのには、すべて温侯にありでござる！”

*王允の話術の巧妙さは、私怨を晴らさせる一方、名誉欲を刺激して行動を促す。呂布を稀代の「英雄」、青史に名を遺す「忠臣」などと持ちあげ、その反対に「汚名が万年まで遺る」ともつけ加えることだ。呂布が血の誓いを立てる処まで追い込んだ。王允の善悪双方の「刷込み」は、「暗筆」で、つきの展開に繋がる。

⑯ 誰を遣わせてあの老いぼれを郿塲から都長安にだまして呼びよせるか……董卓は猜疑心が強く、必ず彼の信認の厚いものでなければいけない。……董卓はとりわけ李肅を信認している。

*呂布を味方に入れたことで、知り合いの「李肅」をも仲間に入れられた。かくて、董卓おびき寄せの

使者・李肅が定まる。かつこの男が、呂布の知り合いであった事実を後から述べる「倒筆」技法。

㉚ 李肅は家で憤懣遣る方ない気分でいた。自分が董卓のために様々してやったのに、見返りがない。
……呂布は軽く笑いながら“逆賊董卓は、上は陛下を欺き、下は群臣を抑えつけ、悪行やりたい放題だ。いまや、王允殿が計を案じて……あとは郿塢に行って老いぼれを都長安にだまして連れて来る人間が必要なんだ。兄貴、……ひとつやってくれないか。もし、行ってくれるならば、一臂の力の助けとなる。董卓を追いだした後には、必ずや兄貴を駿馬に乗れるような高官につける。”といった。

*ここも、李肅の具体的な冷遇を後から述べた「倒筆」技法。李肅は呂布の言葉を聞いて同意してくれ、郿塢に董卓を迎えて行く手筈が調い詔書を携えて向かう。

㉛ 董卓の面前で、“申し上げます。陛下は幼少で多病、それにご存じのとおり、朝廷を治める徳もありません。そこであなた様に禅定したいとの思い。どうか天子の位に登り玉座にお着き下さい。”と述べた。董卓はずっとこの言葉を待っていた。“李肅、お前の言葉に偽りはないな？”“いつあなた様に偽りを申しましたか？”……“あの王允はどうじゃ？”“王允様はいま大変な忙しさで、あなた様のために、禅定を受ける受禅台を設置しているところです。”董卓は嬉しくて身体を揺れ動かし、得意げになん度もうなづいた。

*郿塢で董卓に会った李肅は、王允の「刷込み」を弄して、董卓の心を動かしたが、それでも董卓には一抹の不安もあり、うるさい王允の考えを尋ねた。ただ、そこは従前から刷り込んでいた帝位への甘い「禅定」の話、それも虚構の「受禅台」建設のことが、すっかり功を奏していたのである。「倒筆」技法。

㉜ 翌朝一番で、慎重な董卓は李傕、郭汜、張濟、樊稠らに命じて、三千の飛熊軍を率いて郿塢を防衛させた。貂蟬を呼んで：“なあ、わしは都に行って、天子に登り玉座に就くのだ。……お前を貴妃の位にしてやろう。”貂蟬は聰明なので、……これはきっと王允様の連環の計が成功したのだ……と悟った。董卓は車列を整えて、郿塢を離れ、李肅を伴って、長安めざし突き進んだ。長安城外に来ると、文武百官が出迎えたが、その中に女婿の李儒の姿はなかった。

*董卓は全く疑わず、天子になったつもりで、愛妃の貂蟬に「貴妃」の位を約束したが、貂蟬は逆に計略が成功していることを確信した。一行は何事もなく長安城外に来ると、実行日前日は、いつものよう文武百官に、皇帝を迎えるが如く出迎えをさせ、油断させた。ちなみに、李儒が出迎えなかつたのは、『演義』では、「病氣」とするが、連闊如は閉門蟄居していたからと解釈したのだろう。

㉝ 当日、董卓は武装兵士一千人を引き連れて、天子の車列を模して参内した。李肅も馬に乗らず、手には剣をひっさげ、車に寄り添って歩いた。呂布は手に画戟をもって傍らに従い、一行は威風堂々として宮城の北の掖門（脇）までやって来たが、黃門官は大声で言いわたした。“金殿には、武装兵は入ることならん。”董卓は思いも寄らぬことではあったが、兵を外に留めおいて、ただ呂布、李肅と僅か数人の親衛だけを連れただけで、車を押し北掖門を入った。北掖門に入るや、黃門官は城門をピタリと閉めた。董卓は……“李肅、受禅台は何処にある。”老いぼれはこの時になつてもまだ虚言だと悟っていない。

*王允の計略どおり、受禅台などありようもなく、董卓は中に閉じ込められた。董卓の心はまだ禅定の期待が脱けずにいた。これも、それまでの董卓に対する「受禅台」の「刷込み」の深さが、「暗筆」技法の効果によって、聴客も不自然に感じないほどに発揮されているのを知る。

㉞ 李肅は一言もいわず、ぐいっと車を前に押した。すると、……金殿の階段の前に至った。王允は大声で叫んだ。“皆の者、逆賊が来た。……”みなはわっと押し寄せ、剣をふりあげて董卓めがけてきた。董卓は車から飛びでて反抗しようとしたやさき、数振の剣が一斉に振り下ろされた。……董卓は中に柔らかい鎧を着けていたので、数剣突き刺したが、急所には至らなかつた。……“俸の奉先はどこだ。”呂布はふりむくと大声でどなつた。“呂布はここだ、詔勅を奉じて逆賊を討つの

だ！”画戟をうち振ると、董卓の喉元を刺した。董卓は避けようとしたが間に合わず、バタリと地面に倒れた。

*王允の号令で董卓に斬りかかったが、最後は義子の呂布に戟で刺し殺される。王允は男女の嫉妬心を利用したのであるが、同時に大義を提示し、「漢の忠臣」にすり替えることで、正当化させた。呂布を董卓から引き離し、両者の反目を徐々に貂蟬を使って激化させ、計略を成功させたのである。すべて「暗筆」技法による。

㉕ 李肅は飛びかかって剣を振り上げ、最後に董卓の首を斬り落とした。呂布は左手に画戟をもち、右手で天子の詔勅を取り出して、高らかに叫んだ。“詔勅を奉じて逆賊を討つ、他の者は不間に付す”と。その時、その場の文武百官、それに将校達はみなひれ伏して、“陛下、有難き幸せ！”文武百官は嬉しさのあまり、涙を流す者すらいた。呂布は王允の前に行き、“司徒殿、李儒は極悪人です。すぐに命を下して捕まえ罰して下さい。”“なるほど、温侯のいうとおりだ。”王允はすぐに命を下した。とその時、すでに李儒をがんじがらめに縛りつけて連行して来る者があった。それは李儒の家人が董卓逮捕という報を得て、衆人で取り囲み李儒を捕まえて、司徒の処へ連行したことであった。

*李肅の本心は、高位の官職欲だから、最後に董卓の首を切りおとす手柄を得ようとしたのであろう。これは前に、李肅が董卓に手柄を立てたのに報われないということの反映で、これも巧妙に「倒筆」技法を暗に使っている。呂布は大義のために詔勅をもって逆賊を討った忠臣になることを、これも王允の「刷込み」で志していた。最後に、貂蟬らの最も手強い敵であった李儒を捕らえ処分することに重点をおいて語り、計略の完成とした。これも、貂蟬のそれまでの死闘の仕返しを暗示した「倒筆」技法といえる。

㉖ 「かつ董卓の死体を市にさらした。長安の庶民たちは、歓喜にあふれ、みな……罵り、つばを吐きかけ、ある者は煉瓦を打ちつけた。……臍の上に蠟燭の芯を点けて点火した……。董卓の腹の脂が……厚いので、何日も燃えて、灯火が消えなかった。王允はまた命令を下し、李肅を郿塢に行かせ董卓の全一族を殺して、郿塢の食糧、金銀をもって帰えらせた。……呂布は貂蟬を娶って自分の屋敷に連れもどした。」

*董卓の悪徳に対する憤りが、すべての庶民にもあったことを最後にのべて、郿塢の董卓一族を殲滅し、そこに隠匿していた宝飾品・諸物資・糧秣などをすべて長安にもち帰った。これも郿塢の状況を思い出させる「倒筆」技法で、改めて巨悪の董卓を誅殺した意味の正当性、青史に名を刻む偉業を印象づけている。こうして、聴客の溜飲を下げさせているのである。上記『連環計雑劇』(第二折)の貂蟬の台詞にいうように、戦乱で別れ別れになった呂布と貂蟬夫婦が、元の鞘へ収まって大団円になっている。

§ 5 場景表白

評書用語で「擺砌末」という。本来は砌末（大小の道具）を置くの意。本論では「場景表白」とする。「表白」とは演者が説き明かすことで、ここでは情景描写をいう。中国の「相声」（落語・漫才）は人物の対話が主で、あまり情景描写をしない。それに対して、「講釈師見て來たような嘘をつき」の川柳にも、聴客に臨場感を与える技法があることを示している。人物が活動する場面の状況を明確に説明するのだ。例えば、城中、寺院から、居室、道路の場所的・方向、規模、景物、置物等々、逐一語りで描出する。人物の活動と場景を調和させ、話の筋と合理的に密接な関連のあるように語ることで、聴客に現実のことと信じ込ませる作用がある。

① 王莽の乱後の長安

長安は王莽期の戦乱で、前漢時代の宮殿、商店街、さらに豪族の屋敷が跡形もなくなり、城中の住民

も少なくなって、家屋もぼろぼろになっていた。董卓はそこで隴右に人を遣って木材を運ばせ、長安城外に瓦を焼く小屋を建て、人民に賦役を強いて宮殿の再建をさせた⁽¹⁸⁾。

*王莽の乱の荒れ果てた長安の状況を述べるとともに、董卓の庶民を労役に強いる強引な性格をも表している。これは演者連闇如の表白で、聴客にこの時代とこの場所の場景を植えつける。長安の再建は決して悪行ではないのに、演者は董卓に対する評をしている。「評書」なる所以である。

② 董卓が建設させた郿塢城廓

董卓は人夫25万人を調達して、長安から250里離れたところに城廓を建設した。郿塢と称す。この城廓の規模とその配置は皇宮とほぼ同じで、城壁の高さ厚さは長安城壁と同じである。郿塢が築城されてから、董卓は民間から若い美しい男女800人を徵集し、毎日管絃歌舞に耽った。やつが蓄えた食料は、2、30年でも食べ尽くせないほどで、金銀財宝は山のように堆く積まれていた⁽¹⁹⁾。

*董卓がいかに横暴で、権力を恣にしていたかを、実際に後漢初期に建設された郿塢の城廓で表現したが、城廓の具体的な事柄は演者も知るすべがなく、『演義』の原文⁽²⁰⁾を参考にして、聴客に分かりやすく語っている。ただ、この郿塢は歴史上無名の地であるが、この話では重要な意味を持っているので、この表白は不可欠である。

③ 王允の屋敷の裏庭

書斎を出てゆっくりと裏庭に来た。月光の下、庭は緑の草が敷きつめられて、花は錦のように咲き乱れ、小川がさらされと流れている。だが王允はそれを愛する気も起こらず、小径に沿って、牡丹亭まで歩く⁽²¹⁾。

*王允の月光の下の庭を描写することで、その庭の素晴らしさを描出するとともに、無力な自分のむなしさをも表している。『演義』は「夜も更け月汎え渡る頃、杖をついて裏庭に入りトビの棚の傍らに立つと、天を仰いではらはらと涙を落とした。と、その時、牡丹の植え込みの亭のひとりで、誰やら歎息する気配がした。」⁽²²⁾とする。月光の下での咲き誇る花は、実際の場景というよりも、聴客に場景を想像させる作用があり、羅貫中が触れなかった月夜の小川の水音を描出したのは、「場景表白」でも、演者の優れた技法の運用といえる。上記京劇『連環計』では、王允がほぼ同様の内容を歌で表現する⁽²³⁾。

④ 王允の屋敷の画閣

二人は急いで画閣に入った。王允は下僕たちを退けて、画閣（彩り豊かな間仕切りのある建物）の鍵をかけた⁽²⁴⁾。

*王允は二人だけで内密の話をするときに、この画閣をよくつかう。ここは、貂蟬に「連環の計」を打ち明けるという重要な言葉を伝える場面。『演義』では、「わしについて画閣に来なさい」。貂蟬が王允について客間にいると、そこにいた女達を下がらせた。貂蟬を正面の席に着かせると、その前に叩頭してひれ伏した⁽²⁵⁾とあり、京劇でもほぼ同様だが⁽²⁶⁾、評書のように「鍵をかける」という用心深い心理を表現した「場景表白」の含む技法にはなっていない。

⑤ 董卓を招く王允の屋敷の準備

屋敷には色鮮やかな提灯をかけ、客間には金襤縞子の幕をはった。真ん中には、董卓の宝座が設けられ、宝座には金襤縞子が敷かれていて、極めて豪華。さらに床には赤い毛氈が敷きつめられていた。厨房も準備万端整え、そこは山中の獣、雲中の雁、陸上の牛羊、海中の海鮮であふれ、呂布の時と確然と違っていた⁽²⁷⁾。

*ここで重要なのは、先の呂布の時とは異なって、董卓の体面を十分満足させるために仕込んだことを様々描出して語っていることだ。これも王允の計略の周到さを表現している。『演義』では、「山海の珍味を並べ、母屋の正面に座を作って、地には綾錦を敷きつめ、建物の内外には垂れ絹を張りめぐらせた。」⁽²⁸⁾とだけなのに対し、評書では聴客に具体的な場景を一一想像させ、呂布の時との相違を鮮明にする「場景表白」技法を存分に用いている。まさに、「見て来たような嘘をつき」の話芸で、その宴席が

眼前に現れ、料理の香りすら漂うというものだ。京劇は、ただ王允の「盛大な酒宴を準備しました」（「特備酒筵与太師痛飲。」）の台詞しかなく、貂蟬の歌舞に重点が置かれている。

⑥ 貂蟬初登場の趣向

王允は身を起こし、家人に命じ屋敷内の全てに灯りを点させた。屋敷内はとりわけ明るく、……“歌舞を！”といつて、王允は董卓の向かいにいた者に御簾を下ろさせた。御簾内は女楽の伴奏で、笙管笛簫の音色が響いた⁽²⁹⁾。

*このように、照明を明るく照らし、しかも御簾のなかに待機させてじらし、音楽にのって貂蟬が登場する。これも王允の演出である。『演義』では、「王允は拝謝し、燭台に灯を入れさせ、女たちだけを残して酒食を勧めさせた。王允が“教坊の演目は珍しくもありますまい。ちょうど家で抱えている娘がおりますから、お目汚しに。”というと、“それは結構”。王允が御簾を下ろさせると、音楽の音が嫋嫋と起こり、女たちに囲まれた貂蟬が御簾の外で舞いだした」と述べる⁽³⁰⁾。ここでは、燭台の輝きと御簾の演出が王允によってなされているが、評書はこれも聴客にその演出が理解しやすいように、「場景表白」の技法を發揮している。臨場感をあたえ、楽が聞こえ舞が見えるようである。上記京劇『連環計』での貂蟬は歌妓ではあるが、幼い時から詩書を読んで頗る大義を知るとしている⁽³¹⁾。

⑦ 丞相府の裏庭の門

呂布が遠くまで逃げたが、董卓はあきらめきれず、裏庭の門を出るところ。まさにこの時、李儒がちょうど入ってくる所で、董卓とぶつかった。バタリ！董卓を地面に倒してしまった。李儒は急いで董卓をかかえ起こした。脇が書院であったので、李儒は董卓を支えて二人入って行った⁽³²⁾。

*呂布が貂蟬と出会っているのを目撃した董卓は、呂布を門まで執拗に追ってきた。偶々女婿の李儒が門に入る所でぶつかるということにして、李儒の大事のために貂蟬を呂布に下賜するようという差し迫った説得に入る場面。李儒はその前に血相を変えて出てきた呂布にも出合っているという、うまい偶然を作り出しているので、この門は重要な役割をしている。『演義』では、「呂布はすでに遠ざかっていた。董卓がなおも追いすがって庭の門を出たとき、慌ただしく駆けこんで来た一人の男と真っ向からぶつかってバッタリと倒れた。さて董卓を突き倒した男は、誰であろう李儒であった。李儒は急いで董卓を扶け起こして書院に入った。“その方、何でここへ来たのじゃ”」とある⁽³³⁾。このように、原作も巧妙にできているが、ここでも二人の焦りが、全く違った心理作用によるものであることで、この「場景表白」技法によっても、目に見えない門が眼前に現れ、頗る意味をなしているのである。

§ 6 「開臉托白」

「開相托白」ともいう。演者が人物の外見を述べ立てること。説唱用語では「托白」自体に、演者の登場人物に関する描写という意味がある。評書では芝居と違い役柄規定の衣装がないので、各登場人物をより具体的に想像させるために、特に「開臉」（「開相」）と称して重要視する。容貌、背丈、体躯、品格などに、被り物、衣服、履物、持ち物などもふくめて細かく描写する。

① 貂蟬の容貌

月の世界の嫦娥か、南天の玉女かと紺う、貂蟬の美貌・品格は抜群で、たとえ講釈師でも形容できないと聴客の想像に委ねる。まさしく淡い桃の花の面立ち、川柳のようなしなやかな腰、赤いサクランボのおちよぼ口、つぶらな大きな目に見つめられると魂も取り憑かれる⁽³⁴⁾。

*これは呂布が初対面の貂蟬を見たときの描写である。美人の比喩には、「柳の細い眉（柳眉）」「大きくてつぶらな目（杏眼）」「卵形の顔（鶯蛋臉）」というのが、通常よく使われる。『演義』では、「まこと月の宮居の仙女かと見まがうばかり。」（果然如月宮仙子）、「一点の桜桃、絳唇啓き」（一点桜桃絳脣）と顔の描写は数少ない。京劇『連環計』も董卓の「容姿絶世、まことに仙女じゃ」（風姿絶世、真乃神

仙界中人物也。) とあるくらいだ。

② 王允の朝服

董卓は王允が朝服を着ているのを見て、大いに得意であった。なぜなら、その当時、規定があって、朝服は勝手に着られず、皇帝に会うか、来駕の時にだけ着たからだ⁽³⁵⁾。

*王允は着々と計略を進めるなかで、董卓に天子になれる錯覚を起こさせるために、朝服を着て出迎えたのである。王允の深謀遠慮がここにも見られる。『演義』では朝服の説明などなく、「王允は礼服を着て出迎え、ご機嫌をうかがった。」(允具朝服出迎、再拜起居。) としか書いていない。当時の人は朝服の意味を知っていたからだろう。

③ 呂布の馬と戟

真ん中に赤兎馬。その馬上に一人の男が端坐して、模様つきの長い柄の戟をもっている。呂布その人だった⁽³⁶⁾。

*呂布といえば、赤兎馬に乗り、長い柄がついた模様つきの武器「戟」をもっている。このイメージをつねに聴客の頭に刷り込んでいる。『演義』にも、「呂布は戟を手に従っていたが、董卓が獻帝と話している隙に戟をひっさげて、内宮を立ち出で、丞相府に馬で乗りつけた。馬を門前につないで戟をもったまま奥へ通り、貂蟬と会った。“裏庭の鳳儀亭でお待ち下さりませ” 貂蟬にいわれて呂布、戟をもって亭へ駆けつけ、欄杆の所に立っていた。」⁽³⁷⁾とあり、毛宗崗の批でも、ここで「戟」と「馬」を執拗に書いていると、ことさらに着意している。この後も、鳳儀亭の場面まで、「戟」は10回も出てくる。評書では、上演の時に振りをつけることを「手面」とよぶ。上記の如く連闇如は京劇などの役者の仕草を取りいれて得意としていたというから、呂布が戟を取った時には、京劇の型を披露していたであろう。北方の「評書」は南方の「評話」の「座唱」(「唱」は歌わなくても演ずることをいう)と違って、立つて講釈する「站唱」だからである。

④ 呂布の容姿

突如池に人影が映っているのが、貂蟬には見えた。その人は、背が高く大きくて、頭に束髪冠をかぶっていた。それで呂布が来たと分かった⁽³⁸⁾。

*池に映っている人影で、すぐに呂布だとわかるくらいに特徴的な容姿であった。『演義』でもほぼ同様で、「窓外の池に束髪冠を付けた極めて大きな人影が映ったので、そっとうかがうと、呂布であった。」とある⁽³⁹⁾。

⑤ 董卓の肥満

車夫はあなた様は太っておいで重いから、お転びなさらぬようにと思い(車夫心説：您肉大身沉、可別摔著。)

*これは董卓が急いで帰り、呂布が貂蟬と密会している処を取り抑えようと車からあわてて降りるときの車夫の思いを述べているが、董卓の体つきを何げなく描写している。董卓は肥っていて追いつけないので、戟を投げつけた。戟は呂布に向かって飛んだ⁽⁴⁰⁾。『演義』でも、「呂布の足早く、肥満した董卓にはとてもおいつけぬ。そこで、戟を投げつけた。」と。

*董卓の肥満を述べると同時に、本来呂布の得意の戟を呂布に投げつけたことに意味があり、これで両者の反目は決定的となる。謀殺された董卓に「人の脂の蠟燭」というものを点けた。庶民が老いぼれの臍の上に蠟燭の芯を点けて点火したのである。董卓の腹の脂がものすごく厚いので、何日も燃えて、火が消えなかつた⁽⁴¹⁾。

*この大げさな表現で、董卓がいかに肥満で贅沢をしていたかを示している。『演義』は、「董卓の死骸は丸々と肥っていたので、見張りの兵士がその臍に灯心を置いて火を点けた所、膏が辺り一面に流れ出した。」⁽⁴²⁾とあって、連闇如は灯をつけたのが軍士や戸吏でなく、庶民に替えて、いかに庶民に憎まれていたかと強調している。

⑥ 董卓の着衣

董卓は……、車から飛び出て反抗しようとしたやさき、数振の剣が一斉に振り下ろされ、ワーッ！董卓はなかに柔らかい鎧を着けていたので、数剣突き刺したが、急所には至らなかった⁽⁴³⁾。

*董卓が騙されて最後に数人に剣で突かれたが、内側に「軟甲」という防刃服を着用していたので、命は免れた。ここは、董卓の用心深さと、この巨悪を簡単に死なさない筋立ての妙である。『演義』では、「董卓は直垂の下に着こんだ鎧に穂先を免れ、臂を刺されて車からころげ落ち、」(卓衷甲不入、傷臂墜車,)、陳寿の『三国志』では⁽⁴⁴⁾、「馬がつまずいてすます。董卓はいぶかって行くのをやめようとした。だが呂布が勧めるので内に甲冑を着て入った」とある。

⑦ 李儒の逮捕時の有様

すでに李儒をがんじがらめに縛りつけて連行して来る者があった。それは彼の家人で董卓が捕まったという報を得て、衆人が取り囲んで李儒を捕まえ、司徒の処へ連行したのであった⁽⁴⁵⁾。

*董卓の女婿で連環の計にからぬようしきりに諫言した李儒を、呂布は最後に捕まえて殺すように進言した。単に捕まえたというのではなく、がんじがらめといっている処が、聴客の気持にそっている。『演義』では、「李儒の家僕が李儒を縛って献上して来たとの知らせがあった。王允は刑場で斬首するよう命じた。」とする⁽⁴⁶⁾。京劇『連環計』最後の18場では、ただ董卓が呂布に刺殺されて終わり、李儒の登場はない。

以上のように、「開臉托白」技法は単にその容姿・有様や所持物などを説明するだけでなく、その表現の中に、人物の性格や演者の批評が込められているのが、評書の特徴といえよう。

§7 掌故補白

掌故とは故事・故実のこと、補白は演者が聴衆の理解を助けるために行う語りである。そこで、「掌故補白」とは歴史上の人物の事蹟や制度の沿革などを引用して、難解な処を補足説明し、話の内容を平易に、また豊かにする技法である。連闇如の評書では、「書外書」とよび、彼の得意とするところともいう。

① 買東西（買い物をする）

前漢は長安に都をおいて西漢とし、後漢は洛陽に都をおいて東漢とした。ここには、故実がある。我々が毎日「東西を買う（買い物をする）」というが、この言葉の起源は漢代にある。というのは、東都洛陽と西都長安が賑やかだったとき、商人が雲集し、市が並び立ち、人々が買い物に出る。東都洛陽に買い物に行くのを「買東」、西都長安に買い物に行くのを「買西」といった。だから、「東西」は市の集まっている代名詞となって、そこで、およそ市場に買い物に行くのを「買東西」というようになった。これが現在まで伝わって、我々も毎日使っている⁽⁴⁷⁾。

ただ、この言葉に典拠は見いだせない。董卓が長安に入ったとき、王莽の戦乱で寂れた市街を復興させる場面での演者連闇如の言葉。たしかに「東西」が「物」で、「買い物」という語は、唐の杜嗣先撰『兔園冊』に出ていて。明清時代には、俗語として通用していたと見え、江戸時代の儒学者・伊藤東涯の『秉燭譚』(1729)でも、「清代には東西とは物をいふ」とあるものの、連闇如の文言の根拠は見出せない。ただ、聴客の好奇心を惹起する作用はあろう。

② 尚父

「董卓はこの時ますます傲慢になって、自ら「尚父」と称し、姜子牙をもって自認していた。姜尚は字を子牙、道号を飛熊、7、80歳になって、渭水の川辺で釣りをしていた。周の文王は夢に飛熊を見た。渭水の川辺に賢人を探そうとし、姜子牙を訪ね、彼を車に支えるようにのせた夢を見た。それで、周の文王は賢人を敬い車を用意して走らせ、姜子牙を西岐まで迎えに行った。姜子牙は周の武王を補佐

し殷の紂王を滅ぼした。八百鎮の諸侯と牧野の戦いに戦勝して、周朝 800 年の天下の礎を築いた人である。それで、“尚父”と尊称される。歴史上いわゆる太公望というのは、他ならぬ姜尚のことである。しかし、この董卓も自ら尚父と名乗って、われこそは漢朝の生き姜子牙と自任しているのは、じつに恬として無恥というべきだ！」と語る⁽⁴⁸⁾

*ここでは、周の文王が夢に飛熊を見て、道号を飛熊という姜尚（呂尚・呂望・太公望）に会いに行くというのは、迷信を避ける連闇如らしくないが、後でも姜尚が出て来るので、ここで由来となった典故をあげている（『史記・齊太公世家第二』）。羅貫中『演義』には、ただ「いよいよ傲慢になり、自ら尚父と称した（愈加驕横、自號為“尚父”）」とあるに過ぎない。連闇如の方は、より具体的に興味深く述べる。

③ 伊尹・呂望

“太師（董卓）の盛徳は漢の天下にあって、商が伊尹を得、周が呂望を得たようなものでござります。”王允のこの 2 句の言葉で、太師は有頂天になった。前記のように、伊尹は商代の重臣、呂望の方は姜子牙、董卓をこの 2 人に擬えたので、嬉しくて堪らない⁽⁴⁹⁾。

*これらは、王允が董卓を懐柔するために、しばしば「刷込み」、取り入る言葉。この徐々に相手の心をその気にさせる評書の技法は「掌故補白」を使った「暗筆」ともいるべきもので、王允が董卓と呂布の反目を駆り立てるのに、周到な「刷込み」が繰り返される。これは紹蟬の言動も同様で、それが董卓と呂布両者の心で先鋭化する処に、この段の巧妙なところがある。羅貫中『演義』には、ただ「“太師のご盛徳の高大さは、伊・周（周公）も及ばぬ程です”（太師盛徳巍巍、伊、周不能及也。）」とあるにすぎない。伊尹の事蹟は『書經・堯典』、呂望のことは『史記・齊太公世家第二』などにある。

④ 堯・舜・禹

“私は幼いときから天文を学びました。近頃、夜空を観測しますに、漢の命運はすでに尽き、太師の功德は天下に鳴り響いています。舜が堯を受け禹がまた舜を継承した如く、まさに天意民心に符合しています。”王允はじつに話が上手く、連環の計を決意したからには、深謀熟慮してこそ、このような言葉がいえるのだ。“なぜならば、聞く所では、舜は二十四孝の初めて、舜は堯に代わって、天下を掌握し、「四凶」を取りのぞき、禹を用いて治水させ、さらに各部族の人材を選んで、天下を整然と統治しました。禹の治水によって、禹の名望と権力は不斷に高くなつて、舜は自分の地位を禹に譲りました。禹は夏王朝を立てて後、中国の歴史上最初の統治者となったのです”⁽⁵⁰⁾。

*ここも、首謀者で学問のある王允だからこそ、董卓を懐柔するための「刷込み」に、禅定の典故を駆使させている。同時に、最後は猜疑心の強い董卓を長安への呼びよせに応じさせる重要な言葉になっている。これはまた「伏筆」技法にもなっている。堯・舜・禹や禅定の事柄は、『書經』の『堯典』『舜典』『大禹謨』などに詳しい。ここは『演義』の原文「“某幼少の頃より天文を見る学んで参りましたが、昨今の天文を見まするに、漢朝の運命はもはや尽きたかに見受けられます。ご功德天下にたぐいなき太師が、舜が堯の譲りを受け、禹が舜の譲りを受けた例にならわてこそ、正に天の心、人の心にかなつたものと存じあげます。”」を祖述している⁽⁵¹⁾。けれども、それ以下は、すべて演者連闇如の「掌故補白」である。

⑤ 絶縳会の故事

東周列国時代、楚の莊王があるとき、文武の群臣のために大宴会を開いた。酒席で、莊王は愛妃をして群臣に酒を注がせた。これは莊王がいけない。飲酒が過ぎれば不祥事がおこる。全ての群臣も打ち解けて大いに飲む。美貌の愛妃に注いで回らせるとはなんたること。その中に、副将の唐狡というのがおり、愛妃の極めて美貌なのに心が動いた。ちょうどその時、突如一陣の風が吹いて、全ての灯火が消えた。唐狡は、この機に手を伸ばして、愛妃の服を引っ張った。愛妃は機嫌を損ね、手を伸ばして、唐狡の兜の縳（房）を引きちぎった。それから莊王の前に跪いて、“わたくしに戯れた者がおります”と訴

えた。唐狡はやましい気持で、恐れて冷や汗が止まらなかった。莊王は聞き終わると、これは君たるわしの誤りだと思った。そこで、命令を伝え、すぐには灯火を点させず、その場にいた将校たちみなの兜から房をちぎり取らせた。それらの将軍たちはどういうことか分からなかつたが、君主のいうことは聞かざるを得ない。兜の房を取つて莊王が指定したお盆のうえに載せた。このようにして、唐狡は救われた。灯火が点されてから、みなはまた酒を飲み続けた。一体誰が服を引いたのか、莊王も知らない。後になって、莊王は秦と戦争し、秦軍に包囲された。唐狡は命をかけて莊王を守り包囲を破つて救つた。莊王は彼に訊いた。“汝は何故に命を棄ててまでわしを救おうとしたのだ？”唐狡は莊王の前に跪いて、“大王、わたくしは絶縳の会で斬首にならなかつた恩に感謝したことです。”莊王は理解した。もしあの日、愛妃の言葉を聞いて、諸将に兜の房を取らさずに、唐狡を殺していたら、今日、わしは死んでいただろう⁽⁵²⁾。

*李儒がこの故事をもちだして、貂蟬を呂布に譲るように説得し、董卓も一時その気になった。『説苑・復恩卷六』にある故事。『演義』にも引くが⁽⁵²⁾、簡略であるのは読書人なら熟知していたからで、連闊如は不案内な現代の聴客に詳しく説いて、為政者の美德を伝えている。「批講」技法をも兼ねていて、彼の「掌故補白」の真骨頂だろう。なお、『説苑』の原文には「一臣」とあるだけで姓名はなく、『演義』は「蔣雄」、評書は「唐狡」としている。

⑥ 執金吾の官職

“もしわしが帝位に就いたら、お前を「執金吾」にしてやろう。”“陛下有難き幸せ。”李肅はうまく調子を合わせ、その場にひれ伏して謝した。“……後漢の光武帝劉秀が言ったのを覚えている。「妻を娶るならば殷麗華、官になるなら執金吾」と。ならばこの官職は結構なものだ”⁽⁵⁴⁾。なお、「殷麗華」は正確には音通の「陰麗華」で、後漢の光武帝劉秀の皇后で明帝の実母。劉秀と同郷で評判の美人、慈悲深く慎ましい性格で控え目であったという（『後漢書』）。

*董卓を都長安に禅定のために招く、その使者・李肅に自分が天子になつたら、「執金吾」の官職を与えてやるといったのを、説明した言葉。官職は『漢書・百官公卿表（上）』『後漢書・百官志』にある。『演義』では、「わしが皇帝となつたならば、そちを執金吾としようぞ」といった。李肅は臣下の礼をとつて拝謝した。』⁽⁵⁵⁾。官職に飢えていた李肅が、それを受けず、後日、董卓謀殺に加担する「伏筆」技法も使っている。

⑦ 貂蟬という語の由来

本来、貂蟬とは漢朝初年に流行した武官がかぶつた帽子のことで、後には徐々に官名に変わつた⁽⁵⁶⁾。

*『漢書・劉向伝』『後漢書・輿服志（下）』『宋史・輿服志』などに記載がある。このことは、『演義』にはない。演者は単に貂蟬の言葉の由来にある「武官」がかぶつた帽子から、国のために身を献げた貂蟬の気質を重ねたとも考えられる。

以上見てくると、連闊如の「掌故補白」は『演義』にもとはあっても、それをさらに補充してかみ砕き、現代の聴客に伝える。さらに、人物の言動のもつ意味も包含させているのである。天子の位を譲渡する「禅定」の典故や「絶縳会」の故事で、「刷込み」や説得させる人物を、王允と李儒にさせているのも、極めて「書理」に適つてゐる。技法が単に典故・故事を聴客への紹介におわらず、それぞれに物語の人物の状況や心情を同時に表出している処に、演者の警抜さを覚えるのである。

§8 批講

「批講」は評書用語で、人物や事柄の批評を、ときには典故を引いて聴客の人物に対する理解を深めさせるものである。

董卓の悪行を批判した批講

- ① 姜子牙は周の武王を補佐し殷の紂王を滅ぼして、八百鎮の諸侯と牧野の戦いに戦勝し、周朝 800 年の天下の礎を築いた“尚父”の呂尚のこと。典故をもって姜を称えることで、尚父と自称する董卓を譏る演者の「批講」。
 - ② 参内にはなんと皇帝の龍車に乗り、帰るときには天子の車駕をならべることや、都に模した郿塢の城廓を、民夫に労役を課して建設させ、そこで享樂に耽った、不遜な董卓の悪行への「批講」。
 - ③ その董卓が文武百官を脅すのに、投降者の手足を切断し、目をくりぬき、舌を抜いて見せたり、そのまま熱湯の鍋で煮させたりすらした。じつに直視できない残忍な行為を行ったことを非難し、董卓には本来恩義のある張温の殺害と合わせて、王允の董卓謀殺の正当性を、演者は早めに聴客に植えつける。董卓の数々の所業は、すべて「伏筆」技法も兼ねる。
 - ④ 董卓は大股で階段をかけのぼり、手を伸ばして、門衛をつかみ、“呂布は何処だ？” “太師、温侯は奥の間に入っています。” “えいっ！” 一押しすると、門衛はもんどり打って倒れた。何しろ董卓は馬鹿力だったから。董卓は大股で奥の間に奔って入ったが、室内はもぬけの殻で、貂蟬はいない。
- * 演者は聰明な李儒の諫言にも係わらず、一時は納得した董卓も、色香の誘惑には抗せず、嫉妬心から呂布が貂蟬に会いに行っていると感じて館へ引き返す場面の焦燥感を表す語りは、「批講」技法としてじつに妙を得ている。
- ⑤ “李儒、お前、腹立たしくはないか？ あいつはわしが陛下と話をしている隙に、わしの愛妃に戯れたやつだ。殺さずにはおかない。” “いえ、太師、殺してはなりません。” “わしの愛妃に手を出したのだぞ、どうして殺してならぬのだ。” 李儒の先の見通しは極めてハッキリしていた。このことは大きな騒ぎになると收拾がつかなくなると。
- * ここも、演者は手強い李儒の聰明な諫言の正当性と、董卓の私欲を対比し「批講」技法で語っている。
- ⑥ 李肅が郿塢の着くと、中の者たちに伝えられる。董卓が申しつけた。“通せ。” 董卓の思い上がった態度は至極横柄なものだった。普通の文武百官なら、誓旨が来たと聞くと、みな香案を準備し、床に跪いて聖旨を受けるものだ。董卓の場合は誓旨の伝達官に詔書をもたせ、中に呼び入れて拝謁させる。渡すことだけが使命の李肅は気にもかけず、恭しく董卓の面前に来て、聖旨を献じた。
- * 董卓の僭越な尊大ぶりが、いかにも帝位をつぐ人間に相応しくなく、演者によってそれが巧妙に形容されている。これが、帝位を餌に騙される結末の暗筆ともいえよう。李肅の応対も対比して、巧妙だ。
- ⑦ 貂蟬を呼んで“なあ、わしは都に行って、天子に登り玉座に就くのだ。天子として南面したら、お前を貴妃の位にしてやろう。” 貂蟬は聰明なので、その場ではひれ伏して感謝したが、心では、これはきっと王允様の連環の計が成功したのだ。老いぼれの最期もやがて来るのだと察知した。
- * 演者はすっかり天子になる気になっている董卓が、容易に騙される精神的状態を語り、同時にその状況を察知して計略の順調さを悟る貂蟬の賢明さも忘れないものである。

貂蟬の聰明さを称えた批講

- ① ある人は、貂蟬には姓名があって、もと山西の文水県の任鴻昌の娘だという。任鴻昌かどうか、あるいは貂蟬がまたどんな来歴か、それはともかく、貂蟬という娘が国のために身を捧げたことは、非常に尊敬すべきであると、演者は「批講」で述べる。上記のように、京劇では「詩書」の心得が献身の心を育んだとしているが、心意気には必ずしも必要はないと思われる。
- ② 貂蟬の美貌について、並の美人ではないことを、演者は型どおりの美辞麗句を連ねずには、呂布の目を通して見た第一印象から語った処が優れている。愛慕の情はすべて目の中にあったという表現に批講の巧みさが反映されている。
- ③ 貂蟬は極めて賢い女性だからこそ、その音を聞き呂布だと知って、急いで身体を斜めにし、急いで

“裏庭の鳳儀亭で待っていて”。呂布は大股で矢のように裏庭に行き、鳳儀亭の前で立っていた。戟をそこに立てかけて貂蟬を待った。気がやきもきしていた。時間はそうない。やがて貂蟬はじらすように花や枝を振り分け出でてきた。呂布は思わず口をついて“果たして月の中の妖精だ。”

- ④ *貂蟬の賢明さは随所に具体的に表現されているが、ここで演者は「極めて賢い」といい、呂布を焚きつけ、かつ董卓が来て密会している現場を見せつける重要な策謀を仕組むという、貂蟬の聰明さを語る「批講」技法。
- ⑤ “將軍こそは當世第一の英雄と思っていました。それが……わが身を老いぼれの好き勝手に、辱めを受けさせようとしています。將軍は、英雄の名がありながら、老いぼれの手の下に押さえつけられています。”貂蟬のこれらの言葉に、いわれた呂布を満面恥じ入るほどに至らせたのも、貂蟬の聰明さを表すと同時に呂布の心理も評する「批講」技法。

王允の知力讃美の批講

- ① 王允が屋敷に董卓を迎えるのに、色鮮やかな提灯をかけ、客間には金欄緞子の幕を張った。真ん中には、董卓のために宝座が設けられ、宝座には金欄緞子が敷かれていて、極めて豪華。その上、床には赤い毛氈が敷きつめられていた。厨房も準備万端で、それは山中の獣、雲中の雁、陸上の牛羊、海の海鮮で、呂布の時と確然と違っていた、とあるこの「場景表白」の念の入れ方は、王允の周到さを、聴客に言葉を惜しまずには「批講」している。
- ② “司徒殿、呂布不明の致す所、申し訳ないことをしました。改めてお詫び申し上げます。”“温侯、何をおっしゃるやら。娘は温侯に差し上げたからには、結婚の時にそれがしは娘を花嫁衣装でお屋敷に届けます。”王允のこれらの虚言はじつに巧妙で、平然と呂布に王允の婿と思わせ、新郎と思わせている。董卓と呂布の反目を貂蟬の美貌を利用して実行するが、その最大の難関は董卓に献上した事實を、演者がいかに曲げて、呂布を納得させるかであった。それを二人だけの密室で、権勢者・董卓が自分の息子の嫁を先に見たいから連れて来いと言わされたから、断り切れなかつたとの虚言をつかう。さらに、演者は思慮深くない呂布の性格と王允の英知の双方を「批講」技法で語っている。

李儒の利発性を述べた批講

- ① 李儒は呂布が顔色を変えているのを見て、聰明な男だから、異変を察知して“温侯、どうなされた?”と訊いた。“太師が病気だというので、入って行ったら……なんと私が彼の愛妃に手を出したと、私を追いだしたのです。”李儒は理解した。“……一時の誤解ですから、決して心に留めぬよう。私が説得しますから。”
- *計略がすべて順調に行くのであれば物語は曲折がない。演者は李儒を事柄が俯瞰できる賢明な人物として形成し、対立軸に据えて、それをもとに「批講」技法を巧妙に運用しているのである。さもなければ、筋立てが余りにも単純になってしまう。

こう見てみると、「批講」の技法は評書の本来の善悪を明確に峻別するだけでなく、その批判は董卓という巨悪以外、夫々の言動によって、複雑な判断・評価を下していることは、「扣子」の中でも知ることができる。

以上、諸技法を見て來たが、演者連闇如は各々の技法を単独で使うだけでなく、複合的運用をしていることを知り得た。評書芸術には複雑な構造が存在し、それが演者の妙味と魅力を發揮させているのである。

むすび

百年以上前の北京の新聞に、識字率は約一割とある。当時近代化の利器と思われていた「新聞」は、購入者があまりにも少ない。新聞は漢文体から白話にしても庶民は読めない。ならばと、講談師に近代化の「演説」を頼もうという声も上がった。だが、それは成功しなかったようである。当時の「演説」はあまりに教育的で、明治の講談師の「教導職」同様に、伝統の話術を存分に發揮できなかつたことが原因らしい。

それに対して、北京では、非識字者の庶民が「三国志」の人物や出来事に関して、互いに議論をしていると書いている。確かに、一千年以上前の子供たちが、劉備が負けると眉を顰めて泣き、曹操が負けると喜んでいたというのだから、とりわけ「三国志」の世界は中国の下層民まで知れわたっていた。講談師は「三国志」だけでなく、広く歴史話を語るので、いわば歴史の教師であった。北京の講談「評書」は、軽妙な語り口で脚色し、聴客に歴史的教訓をあたえ、正義感、倫理観を育む、中国民衆の生活、歴史の芸能的教育で、民衆の大切な精神の糧であった。と同時に、言葉の表現を豊かにし、改まつた社会性言語や新旧の語彙を聴客に教える。

語り物は、人物の身分、男女、年齢、性格などによって語り分ける必要があるが、その人物の姿が見え、その人の声が聞こえるように感じさせなければならない。早間で語るのに乱れず、遅間で語るのにだれず、どこから速く入り、どこで止めるかを掌握していることが肝要である。速いところ「貫口・串口」から遅くするのには、なめらかなテンポの転換をし、起伏、波頭の感覚を与えてこそ「評書」の醍醐味というものだ。鳥獣、車馬の音や人の声色（「八技・音響」）も臨場感を与え、その場を引き立たせる。その人物に似せて、時にその人物になり「入角色」、時に人物を離れ「出角色」る。その人物になるときも、全く日常・現実の人間そのままでは、芸術性を失うので、伝統的型の「手面」で品格を備えなければならない。

中国の講談には、師匠の芸の口調と振りとが「なぜそうするか」の細かい道理を悟る「悟書」（「書」とは芸能用語で「語る」、「語り物」の意味）という言葉がある。これによって、代々名人上手と称えられる人が伝えてきた芸を継承するのである。だが、全くの物真似は不可で、自分で「練る」ことが求められる。修業の段階は次のようにある。「学」（まねる）から「還魂」書（だめだしをうける）、そして「通」（一通りできる）、それから「精」（細かいところまで行き届く）、最後に「融」（融通無碍・自由自在に本題の筋の通った語りをする）となれば名人といわれる。語り物は、そう生易しい芸能ではない。

評書演者には、教養が求められる。連闊如は私塾に通っていて、その頃から評書を好んで聴いていたという。徐々に聴いたものを覚えてしまった。だが入門は、24歳の時である。一方、1930年代には、有名な高著（筆名云游客）『江湖叢談』を著し、新聞に投稿をする芸人文筆家でもあって、33歳で『民声報』の編集者にもなった。評書家が「先生」といわれるゆえんである（蓑笠翁『醒木驚天連闊如』（当代中国出版社）2005）。

さて、本論は評書芸術の技法を、実際の演出本によってどのように運用されているかを見てきた。そもそも『三国志演義』自体が、じつに説書的要素が濃厚なもので、そこが人気のある理由の一つであろう。それでも、現在の評書演者が口演した演出本を見ると、やはり『演義』のような書き言葉より、口頭芸術性が鮮明に出ている。すべての技法を駆使し、演者の口一つで、全くの無の空間に、活きた人間を活躍させ、非日常的な事件を引き起こすのである。この声の芸術は、耳をそばだてる聴客を楽しく、快く、分かりやすく、親しみやすく、為になり、惹きつけて放さない「扣住」で、すっかりその世界に包みこんでしまう魔力をもつているのである。

本論の「連環の計」は、すべて董卓謀殺の事件に収斂されていくのであるが、それに係わる首謀者

は、故意に設けられた、突然の意外な「驚人筆」によって言動する。どのような物語にも「驚人筆」技法は使われる。だが、利用される人物も無意識に「刷込み」を受けて、それがじわじわと相手を追いこむ「暗筆」技法になっている点で、際だった特徴を見せてている。ともあれ、その筋立ての巧妙さに改めて驚嘆すると同時に、それを評書として口頭芸術に仕上げた評書演者の尽力を知り得たことは、大きな収穫であった。

本論を作成するにあたり、神奈川大学の鳥越輝昭名誉教授、ならびに同大学の非文字研究センターの皆さまに研究のご支援を賜った。ここに、改めて深く鳴謝の申し上げる次第である。

識於 2024 年 11 月中浣

注

- (1) 『錦雲堂暗定連環計雜劇』(臧晋叔撰『元曲選』中華書局 1979)
- (2) 『京劇叢刊』第十五集(中国戲曲研究院編輯 新文芸出版社 1953)
- (3) 毛宗崗評『全図繡像三国演義』(内蒙古人民出版社 1981)
- (4) 吳宗錫主編『評彈文化詞典』名詞・術語篇(漢語大詞典出版社 1996)
- (5) 「『救母經』と『救母宝卷』の目連物に関する説唱芸能の試論」(一橋大学『社会学研究』(41) 2003・2)
- (6) 云游客『江湖叢談』44 頁~45 頁(中国曲芸出版社 1988)
- (7) 『評書三国演義』(上)(見返し)および『縱談『三国演義』』(中華書局 2006)
- (8) 范暉撰『後漢書』(5C 前半)の成書は陳寿撰『三国志』(3C 後半)より百年以上後代。
- (9) 三年四月，司徒王允，尚書僕射士孫瑞，卓將呂布共謀誅卓。是時，天子有疾新愈，大會未央殿。布使同郡騎都尉李肅等，將親兵十餘人。偽著衛士服守掖門。布懷詔書。卓至，肅等格卓。卓驚呼布所在。布曰：「有詔」，遂殺卓，夷三族。主薄田景前趨卓尸，布又殺之；凡所殺三人，餘莫敢動。
- (10) 馬蹶不前，卓心怪欲止，布勸使行，乃衷甲而入。
- (11) 暴卓尸於市。卓素肥，膏流浸地，草爲之丹。守尸吏瞑以爲大炷，置卓臍中以爲燈，光明達旦，如是積日。
- (12) 『魏書・呂布伝』に「卓自以遇人無礼，恐人謀己，行止常以布自衛。然卓性剛而褊，忿不思難，嘗小失意，拔手戟擲布。布拳捷避之，爲卓顧謝，卓意亦解。由是陰怨卓。卓常使布守中閣，布與卓侍婢私通，恐事發覺，心不自安。」
- (13) 『魏書・呂布伝』に「先是，司徒王允以布州里壯健，厚接納之。後布詣允，陳卓幾見殺狀。時允与僕射士孫瑞密謀誅卓，是以告布使爲內忬。布曰：奈如父子何。允曰：君自姓呂，本非骨肉。今憂死不暇，何謂父子。布遂許之，手刃刺卓。」
- (14) 『三国志平話』3 頁(株式会社光栄 1999)
- (15) 途巷中小兒薄劣，其家所厭苦，輒与錢令聚坐聽說古話，至說三国事，聞劉玄德敗，顰蹙有出涕者，聞曹操敗，即喜暢快。
- (16) 『三分事略』『三国志平話』などで(袁世碩『古本小説集成』『三分事略』『三国志平話』の前言(上海古籍出版社 1990))。中川諭『三国志平話』11 頁(株式会社光栄 1999)。また雜劇『連環計雜劇』の台本も見られる(注 1)。
- (17) 毛宗崗の毛批(注 3)に挙げた「伏筆(伏線)」は以下の 3 個所である。①郿塢の建設が後の董卓謀殺の伏線。董卓が長安に不在であることが、王允たちに密議を可能にした。②王允が董卓と酒宴で、度々禪讓に言及して董卓をだますこと。但し、これは一度ではないので、「暗筆」としたい。③呂布が王允に説得されて、董卓謀殺の誓いを立てること。これらは、『演義』につけられたものであるから、文学としての筆法「伏筆」というものであろう。それに対して、ここでは、それをふくめて後の状況を生み出す技法には、徐々にそれを醸し出したりする「暗筆」技法が巧妙に敷かれているので、本論では「扣子」の中で指摘する法を取った。
- (18) 因爲長安經過了王莽時期的戰爭，西漢時期的宮殿，商街還有豪門府第都蕩然無存了，城中百姓也不多，住的房子也很破爛。董卓就派人到隴右拉木材，在長安城外蓋瓦窯，逼迫老百姓充当民役，重新建造宮殿。
- (19) 董卓調用民夫二十五萬在離長安城二百五十里的地方修建了一座城，叫郿塢。這座城的規模和布局跟皇宮差不多，城牆又高又厚，跟長安城的城牆一樣。郿塢修好之後，董卓從民間抓來少男美女八百名，整天弦樂歌舞不斷。他儲存的糧食二三十年都吃不完，金銀珠寶堆積如山。

- (20) 離長安城二百五十里，別築郿塢，役民夫二十五万人築之：其城郭高下厚薄一如長安，內蓋宮室，倉庫屯積二十年糧食；選民間少年美女八百人，實其中，金玉，彩帛，珍珠堆積不知其數。なお、陳壽『三国志・董卓伝』には、「築郿塢，高與長安城埒，積穀為三十年儲。」とあり、『英雄伝』には「郿去長安二百六十里」と記す。
- (21) 走出書房，漫步來到後花園。月光下，花園中綠草如茵，繁花似錦，溪水潺潺。王司徒無心觀賞，順著甬道走到牡丹亭前。
- (22) 至夜深月明，策杖步入後園，立於荼蘼架側，仰天垂淚，忽聞有人在牡丹畔，長吁短嘆。
- (23) 転過了荼蘼架牡丹池畔，借月光信步兒來到花園。
- (24) 兩個人快步走進画閣。王允吩咐手下人退出去，然後反身就把画閣閂上了。
- (25) “隨我到画閣中來。”貂蟬跟允到閣中，允尅叱出婦妾，納貂蟬於坐，叩頭便拜。
- (26) 隨我去到暖閣，有話對你言講。手挽手與貂蟬暖閣來進，不由我一陣陣淚灑衣襟。為國家我只得屈膝跪定。
- (27) 府中掛起彩燈，在客廳預備錦緞的幔帳，正中給董卓設了一個寶座，寶座上鋪著錦緞，非常豪華，而且地上萬鋪紅氈。廚房也預備好了，那真是山中走獸雲中雁，陸地牛羊海底鮮，跟對付呂布就截然不同了。
- (28) 水陸畢陳，於前廳正中設座，錦繡舖地，內外各設帷幔。
- (29) 王站起身形，命家人把廳中所有的燈都點著了，廳裡特別亮。……“歌舞上來！”王允命人在董卓的對面放下簾籠，在簾內是女樂伴奏，笙管笛簫聲音嘹亮。
- (30) 允拜謝。堂中點上画燭，止留女使進酒供食。允曰：“教坊之樂，不足供奉：偶有家伎，敢使承應。”卓曰：“甚妙。”允教放下簾櫳，笙簧繚繞，簇捧貂蟬舞於簾外。
- (31) 自幼父母双亡，落在王司徒府中，習樂歌舞，充当歌姬。自幼也曾讀過詩書，頗知大義。
- (32) 呂布跑遠了，董卓不甘心，就追出後花園的園門。就在這時，李儒從外迎進來，跟董卓兩個人撞上了。扑通！把董卓撞倒在地。李儒趕緊把董卓攙扶起來。旁邊就是書院，李儒攙著董卓，爺兒倆進來。
- (33) 布已走遠。卓趕出園門。一人飛奔前來，與卓胸膛相撞，卓倒於地。那撞倒董卓的人，正是李儒。當下李儒扶起董卓，至書院中坐定。卓曰：“汝為何來此？”
- (34) 這是月裏嫦娥還是南天玉女。貂蟬的美貌氣質與衆不同，就是我們說書人也無法形容，那真是淡淡桃花面，青青楊柳腰，朱唇一點貌多嬌，杏眼一挑，把人的真魂勾掉。
- (35) 董卓一看他穿著朝服，非常得意。因為那時是有規矩的，衣服不能隨便，大臣身穿朝服，只有面見皇上或者接駕入府時才能穿。
- (36) 當中一匹赤兔馬，馬上端坐一人，手持花桿方天戟，正是呂布。
- (37) 布執戟相隨，見卓與獻帝共談，便乘間提戟出內門，上馬徑投相府來，係馬府前，提戟入後堂，尋見貂蟬。蟬曰：“汝可去後園中鳳儀亭等我。”布提戟徑往。
- (38) 突然看見水池中照出一個人影，此人又高又大，頭戴束髮冠。她心中明白，這是呂布來了。
- (39) 呂布には、上記陳登の「勇あれど謀なし（有勇無謀）」という言葉が固定しているが、一方で貂蟬に対する関係については貂蟬の計略上の言葉とは異なり、決して激しい非難を受けていないのは、元代の上記『三分事略』『三国志平話』『連環計雜劇』（第二折）の「当日呂布爲丁建陽養子。丁建陽却將您孩兒，配與呂布為妻子。後來，黃巾賊作亂，俺夫妻二人陣中上失散。不知呂布去向。」などに、呂布と貂蟬は本来夫婦であったのが戦乱で離別したとあることが影響しているかも知れない（注16）。
- (40) 董卓又肥又胖，追不上，乾脆把戟往前一擲，這戟直奔呂布。
- (41) 紿董卓點上人油燭。老百姓在老賊的肚臍眼兒上安了一個蠟捻兒，點著了燒。他膛油也太厚了，燒了好幾天，燈都不滅。
- (42) 卓尸肥胖，看尸軍士以火置其臍中為燈，膏流滿地。陳壽『三国志』にも、「守尸吏瞑以為大炷，置卓臍中以為燈，光明達旦，如是積日。」とあり、董卓の肥満は早くから認識されていた。
- (43) 從車裡躡出來，剛要反抗，這幾口寶劍一齊往下落，嚇！董卓身上穿這軟甲，幾劍扎上了，沒刺中要害，只有董卓的右臂中了一劍，血就流出來了。
- (44) 馬躡不前，卓心怪欲止，布勸使行，乃衷甲而入。
- (45) 已經有人把李儒五花大綁送來了，原來他的家人得報董卓被捉，衆人往上一擁，就把李儒捉住了，送到司徒面前。
- (46) 人報李儒家奴已將李儒綁縛來獻。王允命縛赴市曹斬之。
- (47) 前辺說過前漢建都在長安，為西漢；後漢定都洛陽，為東漢，這裡還有個掌故。我們天天說買東西，這買東

西就起源于漢朝。因為東都洛陽和西都長安熱鬧的時候商賈雲集，市井林立，人們出去購物，到東都洛陽購物簡稱買東，到西都長安購物簡稱買西，所以東西就成為集市的代名詞，凡是出門到市場上購物就叫買東西。這買東西一直流傳到現在，我們天天使用。

- (48) 董卓這時更加驕橫，而且自称“尚父”，其實就是以姜子牙自居。姜尚，字子牙，道号飛熊，七八十歲了在渭水河邊垂鉤釣魚。因為周文王夜夢飛熊，到渭水河邊訪賢，訪到姜子牙，把他扶到車上，周文王捧轂推輪，把姜子牙接到西岐。姜子牙保周武王捧主伐紂，會合八百鎮諸侯，牧野一戰成功，打下大周朝八百年天下，所以被尊稱為“尚父”。歷史上說的太公望也就是姜尚。而這董卓也自称尚父，我就是漢朝的姜子牙，真是恬不知恥！
- (49) “太師，我想有太師盛德，漢室天下如商得伊尹，周得呂望。”王允這兩句話說得董卓心花怒放。咱們前邊說過，伊尹是商朝的重臣，呂望則是姜子牙，把董卓比作這二人，他能不愛聽嗎？
- (50) “我自幼學習天文，近日夜觀天象，我看漢家氣數已盡，太師功德震於天下，如同舜之受堯，禹之繼舜，正合天意民心。他說你董卓的功德布于天下，如同舜繼承堯，禹又繼承舜，這正符合天意民心。”王允會說話，既然定下連環計，他得深思熟慮，所以才這麼說。“因為相傳是舜是中國二十四孝之首，舜接替堯，然後主掌天下，剪除四凶，用大禹治水，還選擇各部落的人才，把天下治理得井井有條。由於大禹治水，禹的威望和權力不斷增高，舜就把自己的地位讓給禹。禹建立夏朝之後，成為中國歷史上第一個統治者。”
- (51) “允自幼頗習天文，夜觀乾象，漢家氣數已盡。太師功德振於天下，若舜之受堯，禹之繼舜，正合天心人意。”
- (52) 在東周列國時期，楚莊王有一次大宴文武群臣。在酒席宴席上，楚莊王命他的愛姬給文武敬酒。這就是楚莊王的不對了，因為喝酒多了就要出事兒，讓所有文武開懷暢飲，你讓你美貌的愛姬跑這兒敬酒幹什麼呢？其中有一員偏將叫唐狡，見楚莊王的愛姬美貌已極，他就動心了。恰在這時，突然颳了一陣風，把酒宴上的燈全都颳滅了。唐狡借這機會伸手扯了扯愛姬的衣服。這愛姬心中不高興了：她一伸手就把唐狡頭盔上的盞纓摘掉了，然後跪在楚莊王的面前声称有人調戲自己。唐狡心中有鬼，嚇的直冒冷汗。楚莊王聽完，心中明白：這是我為君的不對。當時他立刻下令：先不要掌燈，在座的衆位將軍把頭上的盞纓摘掉。這些戰將不知道是怎麼回事，但國君說話不能不聽，就都把盞纓摘下來了，放在楚莊王指定的盤子裡。這麼一來，就把唐狡給救了。等掌上燈，衆人仍然吃酒，到底誰揪的衣服，楚莊王也不知道。後來楚莊王跟秦国打仗，被秦軍包圍，唐狡冒死保護楚莊王殺出重圍，把他救了。楚莊王就問他：“你為何捨命救我？”唐狡跪在莊王面前：“大王，我謝您絕纓會上不斬之恩！”楚莊王明白了：如果那天聽了愛姬的話，不讓衆將摘掉盞纓，我要把這唐狡殺了，今天我可就死了。
- (53) 楚莊王絕纓之會，不究戲愛姬之蔣雄，後為秦兵所困，得其死力相救。
- (54) “如果老夫登基，就封你為執金吾。”“謝萬歲。”李肅也真會來事兒，當時就跪倒謝恩，記得漢光武劉秀就說過：娶妻當娶殷麗華，當官應做執金吾（『後漢書』卷十「皇后紀第十上」の「光烈陰皇后」には「士宦當作執金吾，娶妻當得陰麗華」とあり、また「帝以后雅性寬仁」とか、「后在位恭儉，少嗜玩，不喜笑謔。性仁孝，多矜慈」と記す）。看來這個官兒不錯。
- (55) “吾為帝，汝當為執金吾。”肅拜謝稱“臣”。
- (56) 本來貂蟬是漢朝初年非常時興的武官戴的帽子，後來逐漸演變成一種官名。